



TAKAOKA CRAFT COMPETITION 2018/32th

今、私たちが考えるクラフトとは？
用と美の結び、その先へ。

昨年の審査会での着地点を波源として、大きな波が生まれようとしている。コンテンポラリー・ファクトリーの区別を無くし、クラフトをアートとプロダクトの差異を互いに抱擁しあったものと仮定した、第32回高岡クラフトコンペティション。審査員にはラウンダバウト・アウトバウンド・オーナーの小林和人氏、シモオデザインの下尾さおり氏、デザイナー・美術作家の寺山紀彦氏を新たに迎え、「抱擁 -Embrace-」をテーマに、今までの区別の間で埋もれていた才能に出会う。

— 高岡クラフトコンペが変わる！

高岡クラフトコンペティション2018審査会は、7月23日(月)24日(火)に行われた。審査員長は昨年・一昨年に引き続き大治将典氏。応募者数216名、応募作品数256種、総合計1033点の作品が並ぶ会場で、時折、出品作品の風鈴が涼しい音を響かせる。

大治：今年は大きな変更点があります。昨年まではファクトリー部門・コンテンポラリー部門の二本柱でそれぞれグランプリを選んでいましたが、もう少しコンペの役割にフォーカスを当て、クラフトマンの登竜門という在り方より、高岡にもっと才能が集まり、それが染み込んでいくようなコンペ

にしたいと区別をなくしました。これまでの二つの柱の間に抜け落ちていた、クラフトともアートとも言えないかもしれないけど、魅力があるというものを掘り上げたいと思います。

大治：今までとは違うものを見出していきたいという意味で、グランプリ1点、優秀賞は各審査員賞の計6点、奨励賞は市長賞、商工会議所会頭賞の2点、地域特別賞は高岡市内出品者への1点になります。明日の審査での各審査員賞は、独断と偏見で自分がこれだと思ったものを選んでいただきます。高岡のコンペということもありますが、しかし「この審査員に見て欲しかったんだ！」という人にもっと出してもらいたいと思っていて、それは作品にも表れているので、こちらキャッチして

選びましょう。皆さんの基準は？

— 各審査員の審査基準。

下尾：30回目の記念のクラフトコンペの時に初めて審査員をさせていただきました。自分たち(シモオデザイン)も、独立した当初からこの場で審査をしていただいて「自分たちは今どこにいるんだろう」ということを測ってもらっていました。前回はその時の気持ちを持ちすぎて審査をしてしまったという思いがあり、今回はその気持ちは横に置き、出品者の「この表現はもっとこうなるかもしれない」という可能性も見出せるように見ていけたらと思っています。

安藤：今回はファクトリーとコンテン

ポラリーの要素が分かれていないんですよ。この方向性ってこれから凄く増えていく可能性がある考え方だと思います。先程大治さんは「高岡に染み込んでいくような」って言ってたけれど、そこはどのように考えていますか？

大治：例えば今までコンペを通してデザイナーとのマッチングや、優秀なクラフトマンを集めるということでやってきた中で、実際に高岡と一緒に何かを始めた人ってごくわずかなんです。ということは、その方法ではないやり方を探さなければならないなど。僕たちが今まで基準と思っていたフィルターだとそれが拘えないんじゃないか、一度フィルターを外してみたら違うものが見えるかもしれないという、実験的な意味合いがとても強いですね。今回に関しては、まだ発表から応募までの時間が短いので今までの流れのタームで来ていると思うんですが、これを2、3年繰り返すと今まで高岡クラフトコンペに出さなかった人たちが応募してくれるのではないかという期待感があります。

安藤：一品ものと複数もの。そこをどういう風に審査していきましょうか。
大治：自分はこういう審査眼で選んだという審査員賞の中で表明してもらいたいと思います。
下尾：高岡のクラフトコンペ自体が進化していこうという？

大治：そうですね。今までの基準や仕組みのままでは高岡への貢献が薄いんじゃないかとの思いがあって、それさえ壊してしまいたいと。ですので、審査員の方々も一緒に悩んでもらえたらなと思います。

一同：微笑

大治：安藤さんの的にはどうですか？審査基準。

安藤：過去2回、僕と中原さん（中原慎一郎氏）の役割みたいなものがあって、「未完成だけど将来性のあるものを二人でできるだけ拾おう」という風にして来たんだけど、今回、複数もの

と一品ものでは完成度に求める度合いが違うので、そこを同時に評価するのは物凄く難しいところですね。どちらに主眼を置くか。見てからもう一度考えようかな。

高橋：僕は一つのメディアの立場で、「Discover Japan」としてこの作品を取り上げたいかどうかを基準にして見たいと思います。作品に関してストーリーや背景が見えるものを選んでいきたいですね。今回「抱擁-Embracement-」というテーマがついて、昨年より変化がある。工芸とアートの領域というのはこれまで見て来た中でも曖昧になっている気がしたので、そういう点で今年は面白いんじゃないかと思っています。

小林：ぱっと見渡しただけでも「これはクラフトコンペっぽいな」というものが散見されます。あくまでも人の暮らしの中（それは日常という場面でもいいし、非日常の場面でもいい）で、誰かの手に渡ってその人の生活の中に組み込まれて浸透していく状況が想像できるかどうかの一つ大きな軸になると思います。最終的には自分が魅力を感じるかどうかが一番の評価基準ですが、自分の店で扱えるかどうかということとはまた少し違う視点です。「自分の店とはカラーが異なるけれど、評価したい」というものも見つけたいと思っています。

寺山：圧倒的に個性を見ていきたいですね。作品が話しかけてくるということが必ずあると思うので。長年培って得た技術で作られたものとか、すごく時間をかけた細かいものというよりは、その人が見えるような作品をピックアップしていきたいなと思います。

「じゃ、いきますか」。色紙を30枚持ち、少し例年よりかしこまった様子で、しかしながらやはり審査員長の人柄のごとく和やかに、一次審査が始まった。1時間半の審査の後、再審査。90種、349点の入選作品が決定し、初日が終了した。

— グランプリが感じさせる可能性。

二日目。広い会場には入選作品だけが残されている。キュッとまとまった空間に緊張が増す。

今回全員で選ぶのはグランプリ1点のため、決定プロセスを例年と異なり、まずグランプリ審査から行う。一人5票を持ち、審査員の票が全て作品の隣に置かれた時点で審議に入る。票が集まった中で議論に上がったものが3点。『針金のスツール』と『光の収穫』、『cylinder』である。

大治：この三つのどれかかなあとは思いますが、皆さんいかがですか？

寺山：『cylinder』は、上まで粒々のままでいってもよかったのかなとは思いますが。

大治：『針金のスツール』は手法的には工業的です。

寺山：こんなに安いのか。これすごく時間がかかってますよ。どうやって作っているんだろう？

大治：鉄ですね。グッと曲げる治具みたいなものはあると思います。中心部から始まって燃っていつずっと繋げていると思います。

安藤：バネ的機能があれば、断然グランプリなんだけどな。

大治：公共施設や古いビルをリノベーションしたホテルのような、あえて殺伐感のあるところに、ボンボンと並んでたらいいですね。

安藤：それだと錆の問題は？

小林：素材を代えてやれば、大丈夫じゃないでしょうか。

寺山：素材の可能性はありますね。

大治：細いピアノ線で作ったらポヨンポヨンとするかもしれない！

安藤：『光の収穫』ってどうやって作っているんだろう？

寺山：段ボールを立てて並べて接着して、上と下をくっつけてグッと織り込むんじゃないでしょうか？わからない。でもこれ、大好きですね。クラフトコンペに段ボールを出すっていう

その心意気もすごいですし、完成されてるし、素材として変化が楽しめるんですよ。今後も何かできそうな可能性を感じます。

高橋：美しいですね。

小林：『針金のスツール』と『光の収穫』の二つが並んだら、またいい。高岡クラフトコンペが変わったなって。

大治：『光の収穫』はここに置かれて初めてもっと良く見えた。素材なのか形なのか、何か影響を受けちゃってるのかなって。

寺山：後ろもすごいですよ。

下尾：うん、綺麗ですね。

安藤：どちらがインパクトあるかですね。

寺山：『光の収穫』は完成しているんですよ。『針金のスツール』はまだ可能性がある。

大治：僕は『針金のスツール』が錆びていつてもカッコいいなって。

下尾：いろんな展開があって、ボリューム感もいいですね。

小林：拡張性を感じられますね。量産化も想定して設計してある。機械で作れば値段もぐっと抑えられるでしょうね。

大治：公共用の屋外家具ってとても高いので、それと比べるとこの値段はそんなものかなという感じですね。これをもっと安くならすごく欲しい。

安藤：それならいいなあ。欲しい。

大治：もう、開発するところから付き合いましょうよ。製造メーカーも探そうよって。

『針金のスツール』、『光の収穫』、『cylinder』の3点で決選投票を行うことに。各自1票を投票した結果、大治氏、小林氏、下尾氏、高橋氏、寺山氏の5票が『針金のスツール』、安藤氏の1票が『光の収穫』。

大治：過半数を超えていますので『針金のスツール』をグランプリとしたいと思います。皆さんよろしいでしょうか。

一同：拍手

— 審査員賞が示す、素材の生かし方と時代性。

短い休憩をはさみ、審査員賞の議論へ。審査員と作品が会話をするように決まっていたものもあれば、引き算と足し算のバランスを見極めながらようやく決まったものもあった。審査員各々の色がしっかりと現れた受賞作品たちである。

真っ先に決定したのは、小林和人賞の『未硝一焚き火ガラス』。

小林：ぱっと見は瞬間芸のように見えますが、ガラスの歴史について熟知していないと作ろうと思わないし、作り手もガラス制作の技術がある方だと思う。そういう人が、わかりやすい技巧を見せつけるのではなく、ものづくりの原初に立ち戻る姿勢をこういう場に出すのは勇気の要ることだと思うんです。素材の持っている特性に寄り添い、素材の持ち味を巴投げするようなものづくりに1票です。

寺山：素材でフィニッシュして、何かに変えていない。そこが引っかかったのかなって。これでコップとかを作っていたら多分選ばなかったのかな。
小林：機能を持たせようとしていたら、試みの純度が一気に落ちてしまう。確かにそうかもしれませんが。

大治：僕だとデザイナーとしての癖でボウルとか作りたい、作っておかなきゃと思っちゃうんですよね。

寺山：これを梱包して送るって勇気がいりますよ。カッコいいな。

下尾：壊れやすいので気をつけてお持ちくださいって書いてありますもんね。

小林：よく見ると本当に美しい宝石のようなんです。こういう通り過ぎてしまいうようなものを我々は気づいていかないと、と。

次に決まったのは、寺山紀彦賞『光の収穫』。

寺山：これはもう、全てを兼ね備えていて、11,880円って書いてあるんですが、値段が恐ろしく安いのでこれで

売っているんだったら買いたいです！

大治：実際、高岡クラフトコンペは展示会時に購入していただけますから。

寺山：まず、素材の段ボール。柔らかいのか硬いのかわからない。作った形状は柔らかいけど、触ると硬い。透け感。中に何も入っていないのに入っているような形状。圧倒的な存在感ですよ。なぜこれを作ったんだろう？空気の形じゃない、ものの形の側を表しているのか、いろいろ考えさせられます。

安藤：素材感を出していないところがいいですね。

寺山：そう、消しているんですよ！この歪みがたまらないんですよ。なんでこんなに惹かれるんだろう。不確定だからですかね。何にもなっていない。
大治：ここに光なんかが入っていたらどうでした？

寺山：いやー、それは蛇足ですよ。

大治：この方もここで止められる人ですね。

「止める勇氣」や「手放し方」はしばしば審査会で聞かれる言葉である。

続いて高橋俊宏賞の『embrace』。
高橋：この薄さの紙はこれだけでもアートになるし、アーティストと組んで素材にもなり得るので、可能性が非常にあると感じました。

大治：良く見えてきました。

下尾：和紙なのにこんなに薄いつているのはすごいですね。オリジナリティがある。

高橋：3点で出品されていますが、真ん中の薄いものを賞に選びたいと思います。

安藤雅信賞は『ストロー』に決定。
安藤：最近世界的にストローの配布をやめるとかプラスチックのビニール袋を廃止していこうという時代の流れの中、「必要は発明の母」という点でいくとタイムリーなアイデアだと思うんです。バリエーション展開をするよりも、携帯できるようにするとか、自在性のある展開で突き詰めた方が将来性

ありますね。

大治：うん。僕もそう思います。

安藤：付属品の発展性もあると思うんだよね。

大治：錫の特性も活かしていますよね。ステンレスだとあるけど、錫ではなかった。

下尾さおり賞は『cylinder』。

下尾：自分で暮らしの中に取り入れていきたいとなると、『Plus 酒器』や『wagtail』などもありましたが、迷いました。『cylinder』は中に落としを入れれば、花も活けられるなと思いました。

大治：あ、なんだか違って見えてきた。それで。

安藤：でも無理して使わなくてもいい。

寺山：日常使いは非常にしづらいですね。

下尾：すごく緊張しますよね。

大治：一番綺麗に光が入るところに台を設けて置いておくという感じですね。

下尾：用途ではないとしたら、もっとボリュームがあってもいいなと。美しいんだけど、まだ納得させてもらっていない感じなんです。もし単品で選んでいいのであれば、小さい方は買ってもいいかなと思います。

大治：風景が見えてきたかな。

下尾：そうですね。最初に会場に入った時から気になる存在ではあって、どこに置いたら綺麗だろうって想像を掻き立ててくれるところまで気持ちを持っていてくれました。同じ感じの形状のものが二つ出品されていたので、他の形状があったら、すんなりと入っていったかなとは思いますが。用途を持たせようとしすぎなくてもただ存在していれば綺麗なので、この作者さんが次にどんな風に作られるのを楽しみですね。

最後に選ばれたのは、大治将典賞『1+0 Tool #1・#2 フォールディングチェア』。

大治：『1+0 Tool #1・#2 フォールディングチェア』はアーティストックな作品だと思うんです。量産品ものの純粋さに惹かれてリデザインしているん

だけれど、当時の使い勝手や量産性を求めていなくて。例えばものすごく綺麗にペーパーをかけているところや、マイナスネジを綺麗に留めているところが、僕にはすごくアーティストックに感じるんです。構造美や仕上げの美しさ。プロダクトとして始まっているんだけど、アートに見える。これがとても美しい場所の一つ置いてあっても何かを感じさせる。そう意味で非常にいいです。

一 工芸の手前の余地に見つけた風景。

高岡の地場産業が金属・漆であることから、市長賞は金属、商工会議所会頭賞は漆を素材としたものから選ばれた。

小林：『銅の壺』は銅管という比較的手に入りやすい身近な素材をうまく使っていますね。

下尾：掘り出したものみたい！

高橋：表面はどうなっているんですか？

小林：これは叩いたり腐食させているんでしょうね。

大治：今までの工芸にない流れの作り方で面白いことができていて魅力的だと思います。これまで「そこまでいかないと工芸じゃない」と言われていた手前に、もっと余地があって、そこにはまた新たな風景があった。それを作者は見つけている感じがします。

小林：この作品の特徴的なところは、鉄瓶のような突き詰めた技巧の工芸とは違うけれど、ホビーでもなく、ちゃんと作品に昇華しているところですね。

満場一致で、市長賞は『銅の壺』に決定した。

寺山：『FUKUFUKU 福福 一合・二合』は、布に染み込ませて巻いているんですね。

小林：仕上げは綺麗ですよ。口だけ生地で本体は乾漆。

大治：台に乗せずに、そのまま卓上に置いた時のゆらゆらしている感じ。

これだけの方がいいですね。

一同：頷く。

商工会議所会頭賞が『FUKUFUKU 福福 一合・二合』に決まった。

将来性や形の追求、審査員それぞれの視点がある中、地元高岡を応援する地域特別賞の審査へ。

大治：まだ足りていないけど、高岡で頑張れって意味合いのものがいいかなと思います。

小林：受賞作品を並べてみましょうか。

安藤：結構ミニマムだね。

大治：すごく変わった！こう見ると『菅紐』かな。

寺山：『菅紐』があると締まりますね。いいのかな。

安藤：賞はメッセージだから。

大治：賞全体のメッセージとしては、これがあることで「そうかな」ってなりますね。安藤さんは店に置きたいですか？

安藤：そういう意味では、これは合格だよ。だけど奨励賞だから未完成を応援したいよね……。

小林：紐っていう単体では未完成感のあるものがここにあるのは、何かメッセージになりませんか？

大治：高岡クラフトコンペの今年のメッセージですよ。

下尾：紐だけを出してくるってすごいですよ。

大治：では、『菅紐』を地域特別賞という方は挙手をお願いします。4対2で過半数を超えましたので、地域特熱賞は『菅紐』に決定です。

一同：拍手

密度が上がったと大治氏が言う。これらは高岡でなくともどこでも通用する作品だと安藤氏が言う。新しい時代への助走との声が聞こえる。高岡クラフトコンペの形がこれからより鮮明になっていくような気がする。来年はどんな作品に出合えるのだろうか。